



## 読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。

ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。  
(編集部より)

### 女性医師の窓

## 久々のバレエ鑑賞

金沢大学附属病院 病理部 阪口 真希

早くも師走に入り、今年を振り返る時期となった。仕事、子育て、家事に追われる毎日ではあったが、今年二つ目の専門医試験を終えて、ご褒美にと足を運んだバレエ鑑賞について綴ろうと思う。

幼少期からバレエを習い、バレリーナに憧れた時期もあるが、恥ずかしながらこれまでモダン・バレエには馴染みがなかった。今回、東京バレエ団が新国立劇場で催した<20世紀の傑作バレエII>で、「ボレロ」をはじめ豪華な四作品を一挙に味わうことができた。その中でも、特に「スプリング・アンド・フォール」に心を動かされ、モダン・バレエの魅力を感じることができた。様々な意味に取れるタイトルで、モダン・ダンスの基本の動き“跳躍と落下”や“春と秋”のほかにも、スプリングは泉、噴水、バネ、根源、またフォールは墮落、滝、崩壊と訳すことができる。ドヴォルザークの「弦楽セレナーデ」にのって、10人の男性と7人の女性が、質素な衣装を身にまとい、よどみなく流れる音楽に身体を動かし続ける。一人ひとりが紡ぎだす動きが絡み合い、音楽と溶け込んで、哀愁と力強さが絶妙に織り成す世界へと引き込まれていった。クラシックバレエのようなストーリーや派手な見せ場がなくとも、音楽を視覚化する振付家ジョン・ノイマイヤーの作品を味わうことができた。この作品に対する芸術監督の思いも垣間見え、30代になり初めてモダン・バレエの面白さとともに、舞台という総合芸術を少し理解できた気がする。

様々なジャンルの舞台があるが、いずれにも共通して言える醍醐味は一期一会ではないだろうか。会場、出演者、観客が同じことはまたとなく、足を運ぶ本人も年齢、置かれている生活状況によって感性が異なる。それら偶然が重なって、心地よい緊張のなかで作り出される一体感は格別である。なかなか機会を持ってないが、舞台鑑賞は貴重な非日常の経験であることを再認識できた。日々紡いでいる日常を大切にしながら、ゆっくりと時間をかけて趣味も育てていきたい。



東京バレエ団 (20世紀の傑作バレエII) スプリング・アンド・フォール

©KIYONORI HASEGAWA